人鏡論　全

220
28
1

此書ハ群書類聚中ニ戴セタリ

ハ西園寺公藤公

文亀三年孟春初五日正二位右大臣・・・

跋文ハ東山義政公

長享元年冬十二月如意日武林隠叟識

神儒佛ノ談ニシテ神道ニ帰着セシメタルナリ

萩原中将　神道家

一如上人　仏者

菱川画図

性子　儒者

道無斎　神ニアラス仏ニアラス儒ニアラス

人鏡論序

抑此物語ハ。凡浮世の全をしるして。其比公をとらは

。柳営義政公奥書ありて世をのがれ

やうは。為世入道がいゆゑ志て家をこ隠すごし。

ゆるてよりうつし遁し凡ば。かゝるまずひとの

心のさざまれるの里をしらんとし。此物語を

人のみさかとなれるもや。長享年中より永正

此末まで殊ゝ邪士世代ゝすざめでたきを

言葉法状くさく。忠孝をしるし大樹代

序者　西園寺　公麿公

本書　大儒　惟子

奥書并外題　東山殿

大織とせし故に。大君萬世をたゞせたまひ。他姓大織になりたまはざりけれバ。さる人我神明の穏をまします。三家の氏を潤色とせしゆへなり。人これ根をねむして根の本よりとづき。門をとうらうして。外をおもてとせバ。我神明のいきをあがめて。異国のめかたとぞゆけしめしたまへりしに。愚老にまさしく天の世人ハまことの父母をしらずして。道によりて家のぞうしをさだかにさだめて世に。生れぬるハうきしうぎんや。文亀三年。立春初五日。正二位内大臣。藤原公藤かさねて序いふ

一如上人
性子
萩原中将

人鏡論

爰に。人皇百有四代の帝。後土御門院の御宇。武将ハ東山殿御治世のとき。長享元年秋の比。都の東山のほとりに。萩原中将とかやいへる人おはしけるが。我家敷島の道にいとふかく。且神道の達人にてありけるが。或日のつれ／＼に。ちかづきよる人のやまひある出家に。一如上人とて。八宗兼学の沙門又その比世に賢人なりともてはやせる真儒此人に。性子といへる人ありけり。二人うちつれ。かのひがし山なる萩原中将のもとへ詣ゆきて。よもすがらつもり浮世の有様など。物語し侍るに

道無斎

らつに。楽に又下楽に。道無斎とて。萬浮世の中。そのたのしみで。月日をおくれく世をのありけれも此人の末席につらなり。ふかく志あるものを抱擁し語りあかすゆゑ。好文人志けまりてね。一如上人とされば それは。本法の先生は。弟子に智恵うすく。信心もなくいねてをさめても。利欲にのぞみをかけて。業まで志あるものとて以へいは。時一性子の云げや忍孫みそくもなくば。られ人仁義によくきゆへに。法身に人の名あさましくなりりとゆへは。本ね笑をひて。いや当人の中されなうにてもなくひゑは。新のするもおく用ぬの法より。仏法末世に深りしより。法身くに名く乃宗門。真くに深り。

まこと釈氏よりもこれを伝じ。もろもろしに経
法をうけつぎさかんなりし世にはられ人のこゝろ
天心を失ひ得る儒道も聖賢の書のみをおもひよむ
ばかりにて文字言句の沙汰にのみかゝはり修ることなし
此二道ともにふるき言葉の数のみ覚えてわれよしのみな
づく。天乃みことのりへはうみなりしとありしかば。十如上
人あきまことを考へて。擲釈仏ハ三千大千世界の
独尊なるゆへにひろく乃衆生の悪道よりおもひ入涅槃
とおもさし。欲気にまよひて殺生をつくり。ず
まう仏の法力にあらずといへるなしとやいふもそ
ねに一機仏の云いやさぞうかくしまし。それを何教

されバこれ父あり。子あり。兄弟あり。夫婦あり。五倫
をもちいる物なれバ。人ハ万物の長なり。仁義礼ハ
ハ天地乃常なりしかバ。天にあつてハ五行といひ。人にあり
ても五常といふ。此五つをもちいるものなし。釈迦も
わきまへず。いかでか此五つをもちいれきんや。目前ハ小乗た
るゆへに。人のみも実をもちなく。たゞよろこびゆへに仁道
まよろび。有心に言さうわ。かと求めてめづらしきに迷ひ。
己が常をうしなひて云バ十如上人の云はしきこゝろいい
その儒者のなやいでわひろくかゝりて喚せいさん。
天竺三乃流生ふかくなのいまにあまく。然末仏弟子
三人のかさうと震旦国にわたりし。孔老回乃三聖人

と化生して。先仁義をもてをしへくれ人の心をやは
らげ。後に佛法を弘しめたまひぬ。仁義の祖師もこれ
釈仏の御弟子也。又日本國中の神々も。皆仏の化身也
仏說に云。海分ニ帰泣ニ我滅後現大明神度ニ衆生と
也。儒道も神道も如来のちゑよりわかるゝといふす
おしといへハ一如上人の心れでく敬酉
天乃仏。出世以前のよの人ハ皆畜生にひとしかるべき也。
我儒道ハ。天地ひらけぬ以前より其義備り。伏羲
をはじめとして。堯王にいたりてよく天地の
孝備り。乾坤わかれ。皆是儒より出てなかりし。
釈尊ハ三人の仏弟子を震旦へつかハし。三聖人とする
のみ。所服して説法する。孔子老子以前ニハ聖人ハな
くいや。仏ハ穆王の時代よりかく。震旦の儒道の漸た
えへる時分也。されバ孔子出ておこるへしな
どおしるのおひぬといひもそてぬよ。一如上人のまま
きろく云。釈仏ハ穆王の時代に出世をいぜんなしじや
只ふ也。過去七仏の説法もこれ皆釈尊一仏のわざ也。今
よ至りても法をひろむる僧ハ皆釈仏之弟一釈迦
とて三千界のかしこおもしろ事也。されバ儒道の次
弟とみけおなんと以へハ性子が云あしく大概と
よべし。先そも過去七仏も釈迦の世より孝経さ
きよ。伏羲ハ天地万物の道理を定て易を作り。神

農ハ耕作のわざを教へ。市をたてゝ。商買することを教へ。草木をなめて醫薬を志らしめ。黄帝ハ衣裳を作り。干戈を作りて。舟車といへる遠人と通じ。又ハ舩を作りて。海路をひらき。又ハ井田の法を作り万民を助く。堯舜よ至りて。天下の大治よく備わり。禹ハ山川水土を治め。湯ハ夏の桀を討て太平をなし。文王武王ハ民の害ひ。悪逆の紂をほろぼし。王業をたて。周公ハ礼楽を制作して万代よ望せり。孔子ハいにしへの聖の道をのべて。五経を述作し。曽子子思孟子まで相傳す。孟子の死しより後法の傳わらず。さるよ異端起て天下の人心をまよわし。これ迷ひひさしく。中のしなかりし。然るに宋の周茂叔といふ人。性の道をさとりて。太極圖説。通書を著して。二程よさづく。二程ハ程明道。程伊川也。二程の門人あまたある中よ楊亀山。謝上蔡をすぐれたり。亀山より羅仲素よ傳へ。仲素より李延平よ傳へ。延平より朱文公よ傳ふ。朱文公四書を注し。五経を論じて世よもつるゆへよ。世々儒道を至誠よ傳へしもの。これなるを起りきりし又ハ一如上人の云。さうれバちゞひをあく。紙法の次第を経らバ。子年万歳を経てのちのちをも終り。つきざりしといへバ。時荻原の中納言いひけるがごとく

ある人の縁談なきまゝ。何よりも根元を不察して枝
葉の論ハつきぬるもの也。根元の縁を知ねバ枝葉ハ
いらざるしておもへるしかぞといひし人ハ一切
上人の云。抑ハ仏法の根元を志られねバわかりがたしや。仏
らハ佛の要法をうけたまはりやさん。先仏に三身を
法身仏ハ形なく。又説法せず。報身仏ハ浄土にましく
て諸くの仏乃ために説法したまふ。阿弥陀
如来薬師如来のごとく。応身仏ハたゞひとにしたがひ
分身無量なり。釈迦如来のごとし。抑佛乃要
説とのへバ。智度論ニ云。般若波羅蜜。實相不顛
倒念想觀已除言説法亦滅。又單傳心印。不
立文字。教外別傳。直指人心。見性成佛。（是達磨）
て。諸經論乃中よりこ。今しばらく一二をわきていは
ん。華嚴經曰初發心時。便成正覺。又淨名曰心淨
心。則淨土淨。楞伽經曰如來清淨禪。大般若曰。才
一義。無有文字。法華經曰。唯佛與佛。乃能究盡諸法
實相。又曰。諸法寂滅相。不可以言宣。涅槃經曰。如
來常住。無有變易。毘盧遮那經曰。我覺本不生。出
過語言道。解節經曰。自證無相法。離言絶四事。
六祖曰。善惡長短。修不修。智不智よかゝずして
只本源清淨ゐなく。光明なりと見バ。即見
性如仏となりて。又極樂世界となゞく。又如來乃

神道談

智見となづく。諸人是をしれどもかれをさとらず。即身是仏也。無心是仏也。心をさとりぬれば自他は万境やむ也。昔行住坐臥の外の当体皆如来の行也と云ふとありし。仏法に顕密の二法あり。顕の方にては歩々声々念々唯有阿弥陀仏と云り。密の方にては心は心月輪にうけ。口には真言を誦し手に念誦をめぐらしぬれば事理倶密の義をとる。一切衆生の色心をもて本尊とさし。唯心の本の仏なり。衆生清浄の当体が仏也。十方三世の諸仏皆是凡夫世尊なれ是皆当体也。此法しらぬ人の流れの内といはれぬれば饗原の中ねのあるは仏法の深理も儒道の深理もまけの(?)

ふりしかたのこゝち(ちう)にておハしましけれバ。それ日の本の
大神のめ(めぐ)みいよ〳〵有がたく仰がん。抑(そもそも)天照皇太神ハ
天地宝山集(てんちほうさんしふにいはく)曰。三乃位(くらゐ)わり。上(うへ)の位ハ花蔵世界(けざうせかい)に居(きよ)し
まし。中(ちう)の位ハ梵天宮(ぼんでんぐう)に居(きよ)し。下(しも)の位ハ。天照皇太神
と顕(あらは)れまし。天竺(てんぢく)にてハ。釈迦(しやか)と化生(けしやう)して無量(むりやう)の
佛とあらハれて法をとかれ。有情(うじやう)無情(むじやう)のくるしみを助(たす)き。
物じしてのこさず。震旦国(しんだんこく)に出(いで)てハ。孔(こう)子ハ聖賢(せいけん)と
生(うま)れて。人道乃知(しる)をとし。へ畜類(ちくるい)にひとしきをさとして
おしへ。そのほかあまたの國々にハ衆生を済(すく)ひくその國々
をよ縁(えん)しきにさうく〳〵。あらゆるものゝ地也。宜(よろ)しく乾坤(けんこん)
社日本天照皇太神宮(きよいくそれ)ハ三界をてらし法界(こゝろ)を仏界(ぶつかい)に

たゞりしやくハ。わざなを仏となづけ。大日如来(だいにちによらい)御(こゝろ)と中道(ちうどう)
まうけしてハ。わざなを実相(じつさう)となづけ。和良(きうなう)を菩薩界(ぼさつかい)
につゝしてハ。わざなを新発(しんぼつ)となづけ。秘蔵(ひざう)乃流(こ)手(て)紙天(てん)
たよのべ(とう)くハ。わざなを天(てん)となづけ。右(こゝざう)乃流(こ)手(て)紙人(かんざう)なり
のべくハ。わざなを人となづけ。用(ゆう)と十方(はう)に籠(かご)して。ハ
わざなを浄土(じやうど)となづけ。徳(とく)紙天下に覆(おほ)ひてハ。わざなを日(じつ)
月(げつ)となづけ。秘蔵(ひざう)の流(こ)足(あし)を餓鬼(がき)地(ぢ)によりてハ。わざなを
を餓鬼(がき)となづけ。左(こざ)の流(こ)足(あし)を畜生(ちくしやう)道(だう)に踏(ふみ)てハ。わ
ざなを畜生(ちくしやう)となづけ。みな両(りやう)を識界(しきかい)よりそめ初て
ハ。わざなを有情(うじやう)となづく。十界(じつかい)まに具(ぐ)し。不二(ふに)法(ほふ)
のゑんのすがたとかぎる。とゞべく九億(おく)四万(まん)三千(ぜん)七百九十

二神を上首として。常に社壇うちに於て。大神通力まし〳〵て不生神也。天よりも来らず地より出をおはせん。元来不去の神也。九万八千五百七十二神を上首として。光に神道をたてし。人間界に大職神力まし〳〵て天地におゐて無二也。故に天にかゝりの主なく。宗廟三界をてらし給ふ故に。日をもて母として。月をもて父として。こちやうそれミな母のうちにまします故に。をすゞしく日輪のごとく。うるはしみのごとく。それめぐみ天のごとく。徳地のごとく。光に善性を施し。心をおさむるとされとし。神紙のうへまいて。正念をおさん。其一切の法ハ。其の法ハし宗なり。然の仏経にいへバ根の中に入れたり書なり。大織冠の云。吾唯一神道ハ。天地をもて書籍とし。日月をもて証明とし。是純一無雑の密室なり。故に儒釈道の三教を要とせず。然ども唯一の間是れなし。神道ハ光花として。ひろく三教の才覚をなし。皆吾道の淵源ときいはんがためなり。又何のさかしげあらんとし。しかれバ仏の道も孔子のおしへもおしきにあらねども。その所にては根とする事。末葉よるにくそひ〳〵。異朝に生ある者多くもらく。儒仏の二道を根源にてせめ。我神国に生つく。神明の誠をもちまへねハ。それ

ちく類に迄も。凡霊神明ハ徳をもて。一切に通じ乎がものゝそてば。まづり一念上人の物語に對して申さん。神明の徳をもて仏に向へバ。一切乃仏ハ徳代ふなる故によろこびして仏の心にかなふ。相秘訣曰。仏乃本地ハ衆生也。衆生乃本地ハ一霊也。一霊乃本地ハ神也。おの〳〵まことにおもひねがへバ。理に當ずと云る無き也。て物をつミせず。人を恵する事ハ二六時中に止る事無。仏も霊なりと云バ。神と云なり。衆生の心ハ神也。ミわらなれバ。物として惠ミ發ざるハなし。天竺の神名ハ眞言。釋迦仏神呪をとて法の深秘とせり。震旦の神仏ハ易の道也。皆我神明乃德し。吾朝神

いふる天竺震旦和をよく〳〵見給へど。仏もとこしこれらすと弁くく説法すれたり。おもて紙志けむるにバぐらし。人の毛根毛孔にあり。九万八千七十二神を立とも。神明の呪とをく讀志けむる也。弘法大師などを。經に異ありて。洗もとも代々どもを。志る人にも見せて。流通給ふに及りて後。神道を傳授志くより誰弁つりず。くく天地乃心し。諸仏乃心も鬼畜乃心も。草木乃心も。皆是神也。その中に人ハ万物乃長主にして。諸神乃長也。人に生れて徳たる心を具へて人にあらず。故に。神明乃心も祖ぢめとして。ちゞめ乃ちゞめにいたるまで。本とかなに志く。もとの心に歸る

を宗なり。頌曰宗ハ万法帰二一源ハ諸縁開寂とを説れバ奥を音神明のみことの里をとく異ならず其上に儒道を釈道をへまへ。是まことに朋友の波こ宅なり。孟子もよくいはまへ。誠の附に五倫乃道も能言て。是そ真儒者とすべし。誠をもて親につかへねまバ大孝立。誠をもて君につかへねまバ大忠立。誠をもて臣をつかひねまバ君の位立ぬ。誠をもて友に交れバ。いづれもまくしむつましく。誠をもて兄につかへねまバ兄弟中和して親子の道らく。誠をもて子をそだてねまバ子よくそだつ。誠をもて夫につかへねまバ夫婦の道和し。誠をもて婦を養へハ家のうちよくそのひ誠をもて国民をつかへバ国家平に治て。是天を日月と仰ぐ。誠をもて万物を見れハ万物の理よく明なり。故に神乃古誠乃一をもて立たり。此誠を志るすなり。たとひまなぶよめども。誠なくバ親の子をそだつるすかハ人にても有るなり。先も躰も誠乃なくて言へバ君子も物いたきねなし。さむさも何れきても能通じそぞろ当也。是をもて唯一誠の神を能たまへく。神これ誠に志て物と志るく誠なるべし。武士の身のひに出て。いかにかはる戦場合戦とたとひへども。其理の誠をもちざるなりけれバ。一旦勝軍のやうなれども。終にはかならず負となり。古の謀計をせし

を太刀の秘ゑて。百人を殺して千人を助る秘奥し
ゆへに。当時神明の仁めぐみするわり。ちかの人世乃合戦ハ子
人を殺さく百人をいらず。皆おのれがためよしてぞ。世のちわ
まわるぞ。故に一旦理を得しるのも皆此時。よ
ろしく海よかろびけれるす。そのくれ眼前おしよみ也。
此秘ともせむかるす。ぴとやもぞしるも也。私欲を去と不
去との二つあり。未錯とよみ工夫するふみをわし。か
ちりんよ殺ひうろ太おなす文なし。其道と道がお
ふくぞあんともれハ志重。志ゝざのハ志らざる也。
申く草木も悪智をもすれバ皆く殺よ志る酒
白し畜生ハ愚癡みしく。中く海とも紙串ほ

まへども。大悪人が多くあへぶるゆへに。悪人をあ
ひそくぞよく悪心をもちげむ也。能く各々が本心をく
ほらんぞ。ほめの神ハいさをあめゆへともしらば。一休
上人も。惟子も短を地まつる。秘なる神明の恵
みひろきなるは此君の心として深くのあらざせ何
へど。和しぬ。叡山のそく。日輪のかりまひきれバ。一休上人
の心。けふや惟子。中ね夜をハ先達にもく宗廟に海
いらんといへハ惟子もむならとて。其日の牛ハ剃
ぢうに。都をたち立せるが。中ねの為ひしハ悉を
とも召具して。伊勢へそうんとて。悉を都しあへ
ハ。己れ剃いかりまで。うりくいねけるが。和もずらむ

つうしき耳(こ)かもいしぬ物がたりにきくさびまゐらする事よ。ようこそ思ひさらまいりたく同宿(どうじう)三人これ出(うちじら)別なそらふことをわすれけるが。思の夜河原(かはら)の外(ほか)りあまく。中ねの給ひけるは。後義(ますずい)は三人は物語まて立分(たちわかれ)しめ給ふよ。何の夢(ゆめ)は何ともわかれいねぶりぬれしけるふくさよはしるび参宮(さんぐう)乃ためとぞしれなどさみよ返(へん)一人志かくは三人のものゝぬげかんずるを返(へん)答(たう)させ。乃中(ぢう)れなぐさみませんとの給ひければ一遍(ぺん)上人も。時子もよくこそ思ひ出(いで)まひしとて出(わかや)こりけるか。大津(おほつ)のうち出(いで)浜(はま)よして中ねの給ひを教(をし)へ人々見んと給ひ鐘(かね)乃音(をと)根のうちとみらむ。なかゞら

乃嶺に錦をちらしきて。都乃風景に
見ごと面白く作るべしとの給ひければ。一如上人と
申へぞ。志賀乃うらにてよめる
花ちらバ鳥とてもかれ見ぬ人乃
家津とにせん志賀乃うら波
障子にハ比叡の山をながめて
山頭高聳護二皇城一　一鏡玉盤照二早明一
三智松風恒凜々　浮雲晴去胸襟清
中にハ杉乃横川を月に見やり給ふて
まれに見る雲乃八重をわけ出り
もめれなき行りある宇乃月

慈恵大師ハ人くれ詩哥を吟て。わのくの風流とこそ。
かゝる哥。文章は道理にかなひ。ひびくたびに。さも面白くも背
ぐるくも吟じ侍るハ。莫念なくぞ侍る。ひえの叡
も色物の錦も。横川の月を見やりかしも。念ぞなく
てハさらにおもしくも面白もなる波ぞ。世の中ハ。莫
念にてこそ。何からもそれなり。万物にふれてこそ
がなしくなる。人ゝ寂ゝ才一乃無務なく作る。思へども
うやれも捨ぐあらしとききたまひし中なるや
とまくいふぐんぐんとのぐれらく。七宝乃身一は
とられし也。十方の浄土も。荘厳なしにぞとあらはれ
られし莫念となり。孔子もきそふし。あなかな

よりひろめし中興今日の禄を身一に述て

もしなり我国の神道も。全くなくてハ立がたき

しられし子細ハ。此比も諸人へ申ハあつて平野の社の

権大夫として社人存するをなげけうち。年来神

宗と為に執もし当家が唯一の大事に唯受一人

の切紙あり。卜部家に伝より。彼権大夫まで世々の弟

として。小分れ物なども折々上京の度毎に卜部氏

のたのみまいらせ。門前乃茶とらひ家門の太守に出で

まねきして。執心の誠を尽されども終に多くの

年のとつみ。空しくゆるしされざりしに。此

美濃国安八郡室沢田民部大輔範也。其妻乃ため

まど添し侍りけるが。ある町人の取もちにより波

りて。是ぞ本山の抱にて。卜部家の大事に一通の切紙

とて秘蔵の事有り。これにさづかりねまゝバ。神道の

根元ハすむならじとえへバ。彼民部大輔うち出てぞ

まいる多年乃望なりとて。白銀十枚に紅綾三巻を

とせ使として。卜部の家へ持たし。往来の大望。

神道一ケの切紙。急ぎ伝授下さるべきに乞ひ願ふ。出座

と侍ば。其ものに早く武家の御方として。早く持

如此仏けに一し不蔵し入。忙幸の事故乱奴目

かくハべ天より流来儀にて。此かみくにの級

を奉りく秋にと。毛上乃芽として。安文乃武士へ

聖者ノ話

綿纂(めんざん)なる文体(ぶんてい)みなく。遠(ゑん)し奇妙(きめう)なれば。すなはち又延す
に。明らかなる政日(やぶやうにち)にてはゐる。明後日(みやうごにち)御相伝(ごさうでん)に来たらん
とのすみやく。絶(つか)にも見縁(みちげん)にたず授受(ざうり)年出(ぶんがく)へもぞ思ぬ。
先生てこれば。神(しん)のたまふ。今がかくいはゝするす
うしせいへて。式中ね吟まひて。沐よ乃気が咲(さく)しけ
るもさらすなしぱ。わくろへしもの上。すゑれしハ神
にたら。何よつきてくもわうれバ。そのれの有りさ後
なりとて。差異(さけん)とぞおりしける。又たがびきかれハ。
しも経下京(しもぎやう)より洛中(らくちう)一乃下(へさ)よくをともありり。
何あわ下まなりとて。諸人(しよにん)下京(しもぎやう)の柳(りうさ)の箱さ業(ぐ)
縁(す)しとぞいひしつひけれバ山ををとしりわる後家(ごけ)のあく

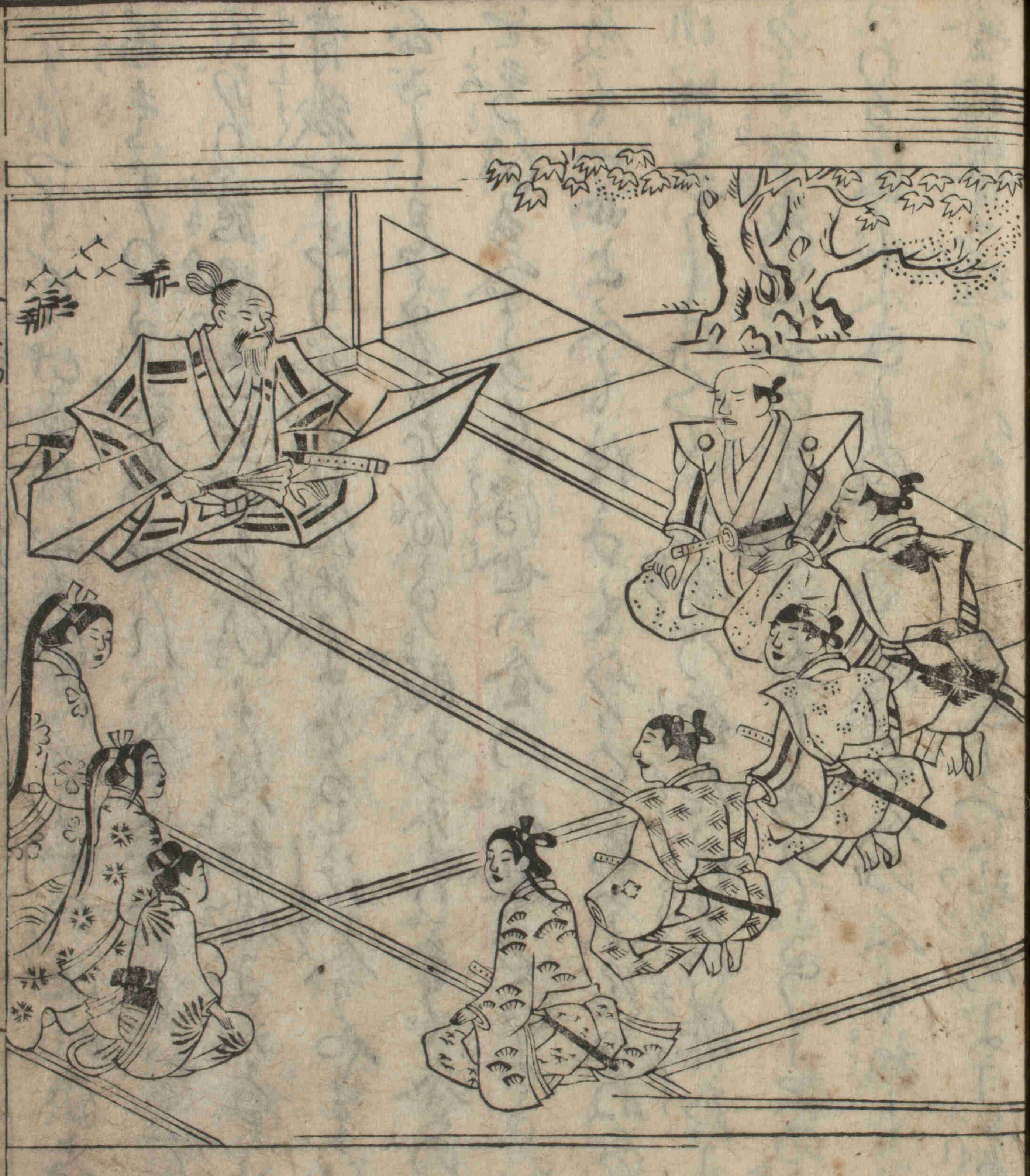
生知

まうくかしこかりしが。女(をんな)の有徳(うとく)なるをぞうらひむ
をひ。金銀沢山(たくさん)にかへりとて。茶器(ざうりだうぐ)よこがまのすりく
びつまり世。しろがねの匙(さじ)なんど。ひつめうしけれバ。を
さは雲上(しやうがく)方へ出入りつく。掛物(さけもの)なぞとして。書德(わとこふ)が
かしこの手なりなど造り部(え)し。力(るるみ)の柄糸(つかいと)かけなどし
真女房(おとによばう)たるわさゝりき。潤沢(じゆんたく)などして。必(ここのかる)代わかさ
とれさ乃いかゞ空ましくつ公ハ臆病(くびやう)乃和尊(わそん)乃。たまはしひとく
も交りくわなどしつゝ余にわ紀医者(いしや)ちんだりとて。
やがて法橋(ほつけう)にならねそこにしりれ人乃とてちやせ
るいしやよ。生知(しやうち)法橋と云名医(めいい)ありける。一番(王ねん)
以前(いぜん)らがかりなりし。法眼(ほうげん)になりくかまなひ。家(ぶびく)へのぞみ傍まで

此醫者(いしや)ハ元来(ぐわんらい)。腕(うで)くよ。曾我(そうが)乃ながれを汲(くみ)まれぜ常(つね)よ空(むな)しく。活計(くわつけい)みくろし。されバ此ハ。都の住居(すまゐ)もなりかねて安藝(あき)乃國へ下りて。草深(くさふか)き中なるく。世をしのぶよし。然(しか)るに。彼柳(やなぎ)原にくいしやハ。又此所(ところ)ハゐなかめしなき名人(めいじん)なりとて。上下もてもてやし。まれなれバ。うへく御座(ござ)ふも。人がらもたじものは何らバ。とりもうくうらひ待(まち)つ。醫術(いじゆつ)の巧者(らうしや)バかりかもわらず。諸事(しよじ)よ心ざし深(ふか)く。そのころの若醫者(いしや)ありとて。活眼(くわつげん)を得(とく)くすでに活眼(くわつげん)に及ぬ出られ。今乃なれハ不通(ふつう)らく金ハ万物(ばんぶつ)のもとよして。乾坤(けんこん)ハ宝(さう)。無上(むじやう)の宝珠(ほうじゆ)にてんたり。

徳太夫

又ひさしかりし此。津の国難波(なには)の里(さと)に。徳太夫(とくだゆう)とて。隠(かくれ)なき長者(ちやうじや)ありけり。何(なに)くまで富(とく)さかへるが。男子(なんし)又ハ女子二人をもちけれバ。かれ徳太夫いひけるハ。嫡子(ちやくし)の太郎ハ。惣領(さうりやう)なれバ。難波の里の住人(ぢうにん)とかさんとし。次郎一人に家財(かざい)田畠(でんばく)のこしにゆづりあたへ。嫁(よめ)をむかへ。相応(さうおう)なる人の娘(むすめ)をとらんとし。京(きやう)なる人をたのみて。已(すで)に位(ゐ)の殿上人(てんじやうびと)めかし人の娘をむかへとりける。次男(じなん)の徳次郎をバ。侍(さぶらひ)よせんとく。在京(ざいきやう)させて。その和(わ)の上手(じやうず)乃歌集(あつめ)て。よろづ芸(げいかう)のならうかて。此世。天下乃両蔵元(りやうぞうもと)のすへ出入(いでいり)せさせ。近所(きんじよ)の人々よ。毎日(まいみちとく)よりあつまりして。色(いろ)ひ乃山にこがれむしろきなしへけるが。此所。あきんどの大名(ちろ)の相待(まうわら)



かくて花の御所の御曹司は石堂丸とて難波津の国
に安置しけるに三男蓮三郎をは従三位中将家にせん
とて比叡山の御門跡の御弟子となり止観院大僧正の御児なり
ぬ今は卿公とて山門の大衆徒のねとめらし。四男
とて東国までくだし下野の国一方の大名といひける弓
取の猶子になしけるなり。五男蓮五郎をば神主に
せ。采女正になさんとて卜部家によばせ右筆下
部あまりつけ兼神道ならはせ。このほかきけば尾張の
国熱田の権宮大夫の孫むすめけぬ。娘むすめ二人とばゞ人
ハ小宮大名の室となり。一人ハ何の大納言とかや人々
御方の小の方となり。一人ハ河内国塩谷判官の法あり

なほつくしけるが我おもひ見るには。かの父（ちゝ）の法文が翁喜（おうき）よりわかる起（おこう）りぬ。志あれば金じにあまれば高き位よのぼり。能縁（のうゑん）遠ともむすび。あるは知識（ちしき）よなりも。神佛有識（いうしよく）をまなり。名高（めいかう）き僧（さうりよ）よなりも。庶人（しよみん）もやまい人のむざし見るすまなる事なり。眼前（がんぜん）あたり。さて金の聖徳（せいとく）と尊（たふと）ひあへ。よろしく浮世（うきよ）ハ金の世界（せかい）といふもとがめ族も一如上人も性ぞもふかく善の繕ふねとぞ流れしをしれ人くらし。各（おのおの）儒道（じゆだう）神道（しんたう）佛道（ぶつだう）よかしあさ智恵（ちゑ）を。金の方へとくおしあつまる。けの勢（あづまのかう）ハあるべしきりのとやらにへバ。三人の人々極（さて）も糸屋が金持よ。道中にも名しさ出して野家（のら）よ目當（それ）て宿（やど）

糸屋五兵衛

とも体（やす）くけれバ。明けバ人くおもてを出けるが性寛いつくまきのふだ乞乃物語よ。金まうくなしねおやハおかげもどもと。儒道ぞうらハ。何ともさいそれにてもなる浪きといひちれバ神乞咲もあれ人べど一家（かろう）の性のことにどうれ。此所の家よ。糸屋（いと）といへしるもナ四よのむすこ一人持（もち）けるが此一家にこそ。以前（いぜん）より。儒者（じゆしや）まぜんとて。京中の儒者（じゆしや）乃弟子（でし）にしてあらさなられ人くいつか。吉びく高（えん）位は五位（ごゐ）さまさ乃ごとおりに川せ乃の柳（やなぎ）ばど舟（ふね）につきまへく文字これ合（がつ）に時乃賞味（しやうみ）を尽（つく）しとて。ふしちれバ四書一部（ししよいちぶ）の。それよこややうく志けるが。それや須臾（すゆ）の藻足（さうやく）志ちか。極（きはめ）く

愛なる子なりとしく。かくてさて彼是とさて彼のくめた
洛中もてはやしけれバ。たゞこの者ひとりやむ
すなはち都が。洛東洛西の武士に威田信中と
ありし人。御前にのがり居られけるが。伜を三百貫の知
行にて抱けり。諸事東西の大名小名がたにめしの
真儒かくへぬるとく。ぐうしやとやさきしなら。ゆゑ
あるすりいひのわけるハ。親の身上じやに自由にぬれ人
バかやうの儒者ハ洛中すみ。幾千万人もぬ人九条屋
又君あつがやうに。あてへ賄し人の口よこうねの戸びら
たつるすなりしず。此戸びらをふにあきバ。ふるくいわ
目ハよ比儒者ぶおともゑとなるをしかゝりけすを

されバ儒者とても。され金のおすおほく持たらず
なり。性子わざの大儒も世にまれなれど。足園田天
の眷属多く。おりしぬまバ。心よからぬおしめぐハ。出
ぬとの。禄ぐ流れ地しなく。ひ人バとろく合点のゆるぶ
徳と。明徳の根元と法親もめるべきすす弟一の高務
おもくひ。かやうに万代より。皆のよのおもんばかるに世ハ。
猶も弥しく世のし。ひ人先がれらの中。西ハ。浮世の人
の立代に金しき西成中なり。よく帰よのゑく名聞
あへといへバ。一如上人のいちくぶつやうに四安秋中されし
ひとゝも。弘の名ハ会銀の波ハねんなりとの絵へでも。
なを斗ゆへて抱とく魚の上人の流玄影や。いでく

大福長者
黒谷へ参詣
之

佛者の舎ずれとも述ん。佛説法の砌。須達長者舎をなすに發せんとしけれ花を志舎代もて法てりく。仏は精舎れば。仏共は災をふくこそあひ。彼とせよけ須達長者は。佛法の大守護神。この人や彼ことよく在家の大がさんなりと。紀剣しあつり。是いむるみ物がりけり法きのきたよ。當大福長者といはれしさん人と当つまく。黒谷まうでしけれるよ。上人出合は危なげ見ゐせやうで。彼舎利の男をあまたよせても。剣よ法の血をあげ。うくあれはよくならじあひしらひ。彼舎利おとをあげ。物く出合より清浄諸仏。仏法の門にやうれ大かふかくも池ひを宗のうらうかくれまりとが。

おさずけなされんとて。彼ことに寒き旅づかれにつけれきつ旅のおもく。おどりあがりもしまつて。念をとへあの人へて馳走(ちそう)なり。此所安養にて金乃浮世(うきよ)とはなれもはずうしもさいのずち。ちと用(よう)ある旅にもて行し。門(もん)前(ぜん)おるに出(いで)て。小(こ)ひ内(つぼ)もを紙にしべ二文めるまど包(つつ)く懐中(くわいちう)しえの座敷(ざしき)に居(ゐ)るをりて。上人にすゝむのひ懐(ふところ)より取出(とりいだ)しさし出けれバ。其紙法。秘蔵(ひさう)の孫(まご)を一人失(うしな)ひしけるまことに老の身の後(あと)にのこる。あまの花の散るとみく。やうしさ紀念さし。其日草(ろうき)せまゐ。せめく追善(ついぜん)のさゝめに細(わざ)とろいさし。差上(さしあげ)なりとて一包さし出しけれバ。上人儀(たいう)にこ。文をおもとて。梅く此安養ハ。物よ

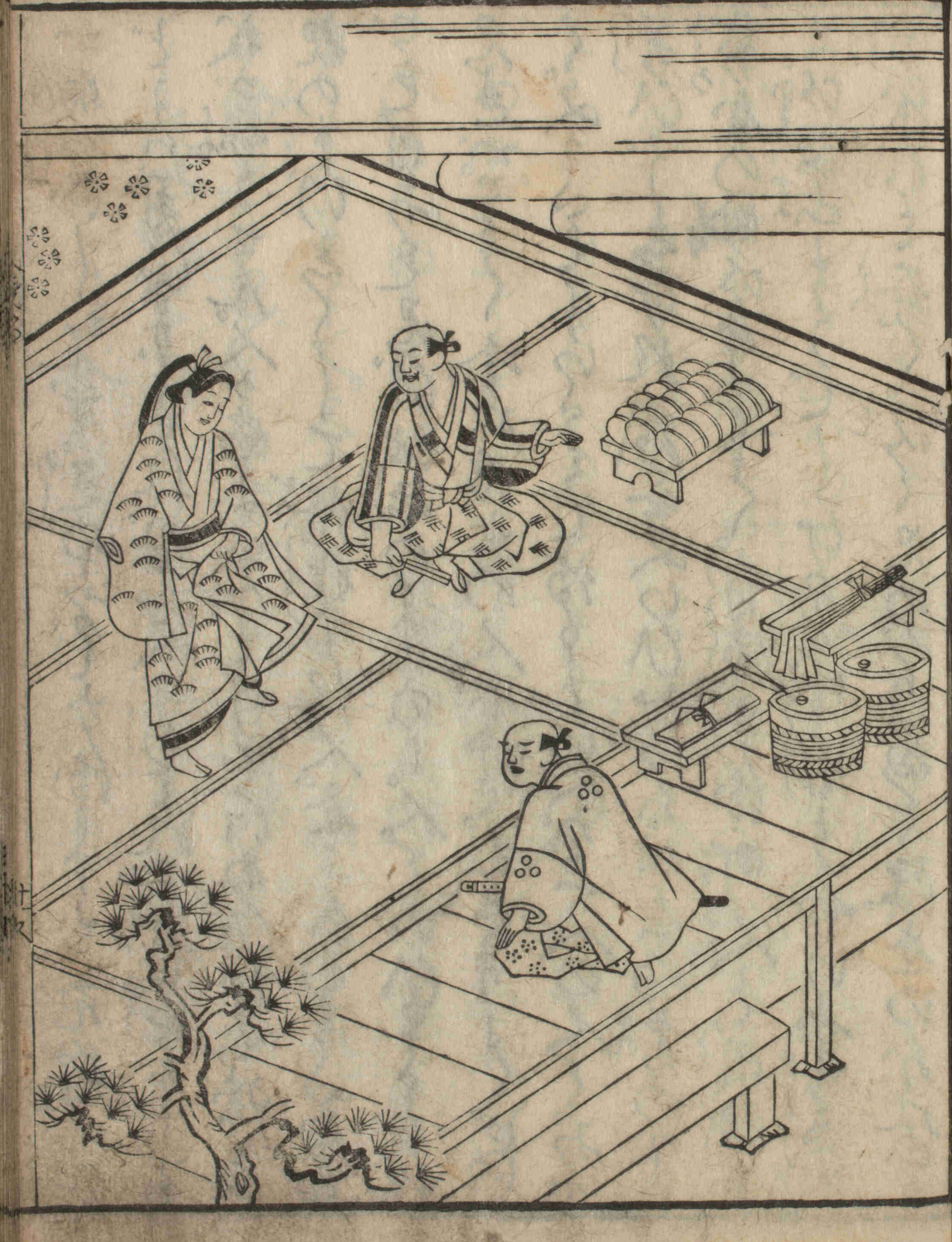
うかつなね一筋(ずぢ)なる法人なく。法念仏(ねんぶつ)をも。人の聞(き)ねかうよほど。ある人なるもとて。常(つね)ぐ家都(とうと)乃為(とりさ)沙汰なく待るよし。一二三銭(どう)よ出ひいしせまへる。後世者(ごせじや)すまくるるしせおいしまくにれ文なりの法人もるこ廣(ひろ)しと申先をまず紀なりやうて。小僧(こぞう)たち。所の御安座の法徒の人よ語(ら)く酒(さけ)をとめよ。故又御安座へ一宗(しう)乃大事(じ)なく待るどもを。ものうれ信心者(しんぎんしや)ねにたくへねバ。開山(くわいさん)の法念を背(そむ)くるうまくの人バとく。念仏安心(ねんぶつあんじん)を。御座(ざ)に待(つ)へ申されね。ひ時の安らしハ。梅く今の威光功徳(いくうくどく)のかうさよだちもち紙今に似(に)せける事に。かやうに人の紀のかつり待るかさいぱよくありがく。覚へ待る。今をもも

てゆく時ハ。極楽世界もちかゝらん。まけにさ
ものゝふハ。あやまりて極楽ゆきとてもえん
来る事ともさきの極楽なれバ。諸侍もまれ出合あり
くなりて。遠ざされぬ事し。是をもてしるよ。
とかく弘法乃大師も合戦をさざりまでかなといへ
ど。中ねの條ひげなハ。是無ぐちひしやうふもある
きゝありぬ。此事少し事の外ろとよ。其小分あの守
位の望ありて。其より将軍家此御旨いまだ直居
よそ。清執養もあるまきよ。彼守一生の和哥
をつゞけてあげまへバ。ちかくもみとも。何それよお
ぼしめしやまで從三位よ任ぜられけることあり

あしなくてのぼりうる事よつら位山
弓矢の道ハ達者なれども
「頼政卿給。めづらしうね頃の位の仰彼無江
国主ハ分限より軍士あまた扶持して。郎等大
きよもりきりまでひろ。此時家来の武功切なく。
伊賀守をかねしまり是よりてぱよくかせた
し。ごうやまひましう見へり。此歌よみ給ハずとも。
三位の昇進をゆるさるべし。是もさし。莫合の
なんるありといへバ「北上人も惟ずも。是ハ極無
中分立ひハずとて。大きな笑あるへバ「頼無以あよ
腹立し各ハいまぢものゝたまりを志かさなりぬ顔るなし

和泉屋
与三郎

き。中京(ちうぐきやう)に和泉(いづみ)屋与(よ)三郎とて。中京一の金持の子。かまどが娘(むすめ)に悪女(あくぢよ)のうまれの一人あり。目ハ陸(ろく)すかつぶ色足(あし)ハ一寸(いつすん)短(みじか)くて。いちんきなれきこともなり。此与三郎が為(ため)よりか。惣領(さうりやう)なれバ。一家(ひとつか)へあちもれしけ處。夫婦(ふうふ)のおさんばゝ。一門兄弟(いちもんきやうだい)も黄金のゝ紀世あ是バあさましき事なし。一生(しやう)人にハ無心(びしん)申さぬやうに。とうふ遣しらく。東京(ひがしのきやう)に一町(ちやう)四方(よはう)の屋敷(やしき)をとりて。め。数多(あまた)借屋(しやくや)を立そく。黄金(わうごん)百枚(まい)としせ置(とき)けるが。皆人々。此金銀にめがくれしゆへに。眼(まなこ)は春がすまふかく立心のみよ又月細(さゞれ)出げくさとりあざし。いひ侍りへ。安眼(あんがん)ありても。一分(ぶん)なしでハ男に立(たて)ず



一眼も見しかゞらず。足のふ具な身なりも。飛脚通ひ給ふ。どうかハ用ひまじきれバ。足又さのミれ不自由なしず。我が嫁にせん。人が嫁にせんとうぞいあひけが。誰にも親のまりましくして俗性よれ人。世にうかありてあまた。どこ。目ふらも見んだ。此娘のまりのこ。人々いひてうる紙。なん事ハどうく今れ浮世の人心やと。おさまりて見ても。くどうちうしいても待りとい人ハ。三人の人々。かが参らひがうまえけれバ。父いひけるハ。此者の書つうら。袋屋の助次郎とてく。有徳なる町人と同宿して比叡の山まうでしけるが。中堂よりやりかへ。見ると大坂ちかく谷く。跡見めぐり。揃く浮世のおれ山な。海ともや。伝教大師のひらきしれ一乗しそのつゐる住が持戒のこの山ハ。海ともかられ。俗身より仮示とのあひしが。さこも見へて清浄なり。誰にも霊山の道場たいひ伝へしが見ん身おごとた。心にまうこ。胴と袖によりけるじうりなり。目をうつさいれく。腹つゞきの拍子も。よどうかぞ浮にみへて待りしが。前後の方。浄院四十人まかあひなひ。揃もくひかし。此袋屋やようとてはや比山おうしけるとて。名をのもてれしいうとてれバ。又よき海苔ともぞくよ。みさのすけ蚊々によりけるかな。どれ比れハ。四十あまりの人の。けさうれ面躰みくぞ覚るもしきハ。今かうし。かうず。いとけうく物のひ給

ひしけるに。ある人なしづかにきゝし人。伏見
おのこよふく縄りなせる力かづけていでき
しりまへり。樓屋よりも下座よ洗きておかい
しけるとおぼしき法印おあひて俗おのがりも也
とぞうりひくさのことをそれしばし此時に
無さひけるにあれ法師人ともきまちのそこともに
志ろね山中なれども何さ海一国のあるじたる
俺ぞ人のおろへすひしなりしかど常今ずれの
うれせよむひかれあなく。人のおらひねどもさきり
るかまひしおもやも。哀ぞおぼへくい風しきる
無うはふもどふとうみて

名もなかりし人ぞに人がもちひねど
うきめしらしうきのはの世や
わすれなりけるとゝふ人もなし
これは文の世をもなげかれしき
二首のうしとれどはしをもつくさに。延命院の住
ようききく。下山し侍るとのへば門弟子も一如もぞ
ちがくて又世の和尚。今の世にかなひ侍る名家に
くびさりおかじ。元来は風ぎものがもとも知。
洗うき位にもものがるゝは切なくてハなしねなき
なりたる世がひしやうに。今時の友ハよわずと
の人ハ為世に咲て。さしこそいはゞやよしなりかはなる

めし以て婚姻（こんいん）河内国（かうちのくに）[illegible]の里に有徳（うとく）の百姓（ひやくしやう）の子
あり侍（さふらひ）にならんとて武道具（ぶだうぐ）を抛（なげう）ち居（ゐ）れども侍（さふらひ）
郎（らう）に造（つく）られし地頭奉行（ちとうぶぎやう）のようにもならずのそふか
しまひ。浪人（らうにん）になりしてりかしへ今の軍（いくさ）物語（ものがたり）なぞし勇（ゆう）
士のふるまひ。毎日（まいにち）なり志ろ大名の百姓は。その事（こと）云
弟子（でし）どもうへもどうしやうしお前世（ぜんせ）の報（むくひ）かとどうりい
ひ志ろひ。らしむうしにかゝりねど。地頭奉行（ちとうぶぎやう）の
人々は。さひざんなとし。礼儀（れいぎ）ふかくあいしらひ
けれはどに。ゆのかどにゝ。人しゆるさぬ名字（みやうじ）名
乗（のりざ）おし。上和尚八郎左つとぞのしもせける。於上
和尚（をしやう）とや稱号（しやうがう）は。河内国高山の慶流（そうりう）。今も彼（かの）寺に

と和尚の嫡孫（ちやくそん）は断絶（だんぜつ）なせしを嘆（なげ）くく居（ゐ）侍りしが。世俗（せぞく）
の譲（ことゆずり）より侍（さふらひ）と含（こと）は持（もち）ても持（もち）ねとのなりとは遠孫（ゑんそん）
よそのかぐ。さんぬる其後。清の出住吉（すみよし）の神主（かんぬし）津守（つもり）
氏。高安（たかやす）が高山家に発（おこ）りも南は宮に河州（かしう）上和尚
の嫡子（ちやくし）彼（かれ）世に漏（もれ）くおはしまする。その人わかれたる
ありさまそでむかしの氏（うき）のゆかりのある人。被官（ひくわん）の末（すえ）。
かまでおる者どもいとなきやむひともなくと絶
されば。高山家我（われ）によほしてむかへとも情（なさけ）をうけ。ふか
くうやまひなひけるあり。彼（かの）百姓（しやう）の上和尚八郎左
衛門とつれて稱号（しやうがう）のかゝ。流ての人々ともめぐく。
多くゆるしなるへと望（のぞ）みけるが。彼（かの）望（しやうだん）乃上和尚家元（げん）

来むりしふうの義士みなくありしかど。声みなも嘆
里ず。八郎たつみのかよ後つぶての悪口し。よ
しくその人とのまずバ。上和尚はおのるまじきろと
て。まゝ金のむしろさらし。地頭奉行の流とも流
ざみく将軍家やろ山ざとの百人衆よがしくろて迷する
れよ。此百姓乃上和尚お入けるれ。かゝる由来称号名
字前の一院をおゝ申つく叶まじとて武宮のりやとり
立寄例の高きのむしろさらし度やへけるよ。殿上人法
治部とつぎけとやとれすとてやとしの人く浮説の
家系出来まりしを後百姓上和尚は家中よとぞり。我
やうに合紙のはくみく。上和尚の嫡流よなりそうへる。

嵐山のふもとにありぬる。嫡僧の上和尚と。座流によせんと。
法人よばはりくすを上せ。嵐山院號の扶助申ひし。正
真乃上和尚と。御世わたなりとて。なにをすあるさ紀り
まゝみく悪説のといひあつまけれどもほどに。世上よ
て。嵐山の門なる上和尚はとして。かく志つくようしね
あぐいひ立てひけれ彼百姓乃上和尚は。正真の嫡流
とはより。出方家へ沈み。山里乃百人衆よなりけれ
まはこそ。才一乃志やうさんなれおど。人とひとせ
けれ。乞世界の冥会ずるさの人の病なりぬるりけるか
どに。彼正真の嵐山の上和尚座はおしくや。出家遂ん。
遁世して。高野山よのがれけまとバ。いよく浮世乃

人〴〵ようしぬゆへと。なげき。そゝりあひて。ざゞめきけれ
ほどに。かの百姓乃上和尚。日本一の上和尚なりと不
きり。出家はもとよりこれが。嘱(ぞく)く浮世の人れさる事し
も。俗姓(ぞくしやう)も。これ合なれ乃あすゝまざらんとの人〴〵は。申おも
を一紙上人も。ゆくとくに和尚がおとじのごとくあり。
何さましさまかりとて。おもてをもし和尚が目をも持
かりて。どうの和尚は。山中(やまなか)といふ所まで侍ねおくりま
は。宿(やど)いらへ出(いで)く。人〴〵伊勢(いせ)と近江(あふこ)乃境川(さかひがは)につきける
に。申ねのおもひけるは。和尚が物語にて。日のくらた
乃事(こと)を見ても。都の宿(そう)のあはれしゝらるゝ千れけるが。
ほとく物語し侍れとありしに。和尚(をしやう)のひごろ乃山に帰(わかくし)

取(て)りなせる家(こや)ありて。私のもののよ老(らう)ぬれば古(いにしへ)はいうごい
ひきん此宮(こや)は。今は氏子(うぢこ)の中より。有徳(うとく)なるものの寄進
ありて。ちかごろきこら孫。吉田(よしだ)殿より正一位(ゐ)大明神(みやうじん)と号する
ますとりへは中々ねのはひけるは。それはいかやうなる故
神まの子細(しさい)ありて。正一位とはさづけられけるとの事
ひきれば。我のものの上は。何の子細もいらず。去ども氏子(うぢこ)
が今此ゆゑて此ゆゑは。正一位の祢宜ひねといへは中々
ねの事ひけるは。此ほど迄世がたれしが。かなしきを
ありきれば。神主がいひけるは。おろかの度の合はれ。御受
も何ぞれ。これを此のらの世とぞ。ふかく思ひまゐらね
ゆへなりと思はれしばその時神主がいひて。ちゝ沢然

のいひしやうなるをなしぬるなり。世中の病(やまひ)だうらは
命のちゞむるとくも。あたらぬものなりといへば。医者
使て。いのちも命なくあたるものなり。それ子細なりと女
ぞぬるよ。手前(てまへ)もおもとしき大名貴人(きにん)のよろこびは。公の
およぶかぎりは。私神を祈(いのり)。世界(せかい)の男のあるやうしけるに
さ。名医(めいい)秘術(ひじゆつ)を尽し。天命(てんめい)のかぎりつきて命(いのち)ぞ
ちからを入。生涯(いきがひ)のかぎりとりて。扨又は中ざき妻の物(もの)は。
よくなかるをまれたをたよりなかれねば。得(え)せだ。い
の事魚をもすも。大きのいのちはなくなし。のびよあをる
ひとりありきた。黄金あまれば。波(ま)るもなしずりし大
医(い)のくむとのものなけきば。扁鵲(へんじやく)が乃何ひ(と)業(なり)

約てく
子も産
産の力

を濁（ぢよく）らひぬるほどに。大かたハ非業（ひごふ）の死（しよ）みなく。命ハ
のかぎりを見る人一人あれしも。金銀乃ため不ず
あらずやといへバ。人〻たが才学（さいかく）ありとも。釈迦（しやか）も文殊（もんじゆ）もお
よびがたしといへバ。人いひけるハ。その人ハ諫（いさめ）と親（おや）と
し識（しき）を友（とも）とすれバよく綴（つゞ）るなりといへども。今乃其
綴（ちよ）を交（まじ）へし諸（ぞう）をよし。識を渡し侍るものハ。人名（ゑんげん）の友ハ
なかり侍るなりよく。人君（えんげん）乃よく紀友とぞのあまた
紀ら紀世とをおもしとぞふなり。一如上人のいひしは
世乃よろしいるくなれども。物出（うく）るハ。黄金のちから
おくハなしねとなりいへバ。ほゝせやしけるかハいかに
もぬるみなく侍る也。とさけバ。女院（によういん）乃御所（ごしよ）よ

女しきさぶらひありけり。下部（しもべ）ありけれがみ三人
あり兄（あに）ハおやが女しきさぶらひのあとをつぎけるが。女院
乃御用（どよう）まげけるにぞ。おさなきより何の行き人よりまハ
みいそくよ又とよ里。當徳（たうとく）よなりもあかげ下（しもべ）アがみの恭（きさ）
の分（なげ）やがて黄金のちからふかく。當上（たうじやう）がくに立まじと也
わかく出（き）けるが。まじ弟（おとゝ）の小二郎（こじらう）と。禁中（きんちう）御まいり
ゐ気よおもしけれバ。おのれとぞ。竹田（たけだ）の里乃長（ちやう）が妻（つま）ありけ
けれ。惣領（さうりやう）の恭（きさ）き黄金（わうごん）乃ちからふかく。位何（ぞくい）の人ハ渡
じなり。やがて人をたね名字（みやうじ）を名乗（なのり）けるが。皆ハ其紀
世たれバ。かの恭（をのなけ）めがうち源（しやせき）よしとて。上下（じやうげ）もてさや
宮殿（きうでん）をも建（ろう）しけれバ。上へみをもまなびくの宣旨（せんじ）ありて。

佃工

禁中(きんちう)御用(ごよう)の物をかゝせあり。京鑓(うまくら)金又ハ菓子なとの
中よりかゝども能所(のうじよ)あまたあれども。黄金なきれバ。名代(な)の
浴人もなしといへバ。一寸上人ゆゑて。これハきこへ人なるを
諸宗(しよしう)の細工(さいく)乃上手(じやうず)ばかりハ。金紙宿(あり)をても。なしぬる
たちとありされバ職世ゆゑく。それこそいとやさしき
ものなり。以後京中(きやうちう)の諸宗(しよしう)乃上手おほくも。日本(にほん)一
乃下手(へさ)おほくも。よづつし細工(さいく)すなる事なし。これくま
にきる細工人(さいくにん)の上手と。彼黄金(わうごん)の蔵(との)とゞつく。さらに
座とひ。大名高家(かうけ)乃望(のぞみ)にまかせつゝひとすれバ。大
名高家(かうけ)もとまらず。無(や)浪人(らうらう)を以下(いげ)まるといへども。皆
下手(へさ)の黄金持(こがねもち)の細工人(さいくにん)。おのれがのさつきとぞ。人(ひと)さし
せバ。いかなる役人も。あひふさぐといふ事もなく。
あまたハ高びなる上手とて。世の人もてはやせるなり。
これよりつまり乃たくみなんぞや。これ金のたくみならず
やといへバ。一寸上人の曰(いはく)。職よ人世の詞(ことば)。これも金言(きんげん)と
ことなれバ。職世ゆゑて。わすられすまじ。人のおとゞむさへ言(こと)
金口(きんぐ)になりもるといへバ。上人ゆゑて。言葉(ことば)乃金(きん)になる
ものなるかハ。いかにハ職世が云。今上人(いつ)の諸言葉(ことば)にこれも
金言(きんげん)なりとおほせらるゝ事を以下といへバ。人々一理(り)いはれ
ぬるとて思(おも)ひける。性世の言職世の金紙お尋(たづ)ねても。金(きん)
下戸(ど)の味(あぢ)ハいかゞハ。それくまうひありける人。喜撰(きせん)一人もな
しといへども。金おほく味をとくすゝむなしとすといへバ。

今の世の人ハ。銭の味ばかりをよく志りて。精進味志る人なし。子細ハ鴨の味ハ。雁より鶴よりも。よ紀ものなれども。雁鶴のあたひ高紀ゆへに。人ごとに賞翫するのあたなしず。そのかきられしかく遠慮あへ。よろしくらぬ世乃。もてなし寛おさへれくこゝろのよはわり。力ハ骨のよくきる事を寛也し。馬ハ足のたゞさを宗とし。人ハ智恵ある紙善人とし。仏ハ利生のある紙思ひ。常楽をハ。速あらそひをしゆるこそうけき。やろくあらひの高慢なるを浮世乃みかしとするゆへハ。られあさく今のうき世のとおぼへひとびハ中将女がひがらの物語

めをさあめ。心あるしきくて。いとあしし。我うから諸人の心。今よのことひつきて様をよくもしるこきなく得るを。行としし得るがハ人の心よくなりしべきんや。旅立ていかく。釈迦乃教も孔子いきてをりしず。一しのうちよ。天下乃人の心をあかよ姫やうこそはへ。さるをあがりし。中将女や。一如上人の才覚よかあしぬれるすよはし。又菜がちりうにも姫ハさすひ也。天下をしろしめすれ人のれ好ミの事よ。いのやうなるをなるをまくする得る。さ子細ハ。きんまん天下乃人。あやめれ花を好めバ。是と白はかりなり。でハむかしよりなかりしにはすわ

ならず并に。ようすがにあさぎ色。とかくはこし文ま

で出でけり。又此人々その好むところはまちまちなれば

なくれ花すたり。ゆくゆくはむかしのごとく黒と白ろと

むかしに又なりひ。かやうの非情のものすら。人

の好むに志たがひて。ひとりの好むおもむくに應じ

けへば。ましてや人民が人君の好をとりとめば。賢人

聖人居くりは宮家に出で。涌ましきこと蟲よ

里人を求むる御世ぞなれ。たまたまも善人を好み求むる

大名も。悪人の家老同名次の家をもて。求むる臣て縁

は善人出来ず。文に横目なんどの。ゆうりやうりを志そ

立蔵さす世なんどたく。人を求むるゆへ。安とくへ善人ありても

悪名なく世おもして。それを求めけん大名なる人の公

あるべきことなりといへば。中ね殿きのひ。義政が行

ひの今物繪ハ皆しく作らごられしハめぐくるる絵物

給ふ氏。東山殿のおもすりに。おどろりあぐりよ。きうろせ戸

なれどありし時。性がいつてもむりしよりぞある

うしを天竺もよろ人をこのめども。經はなしね

なり。上一人の流おこれひはけるはなくいへど上

は流つてきにふろく。流志あしれバ。今もむかしもめ

でたく御後さん。義政がいつて。是もうまそある

るなり。上の流つてきまでもなく。ひろく天下

の人は。親に孝なるものの。君に忠あるものの。友に

東山殿が書の跋をかけたるを見れバ義政も此名工盛セし名カ

禄あるもの。諸藝(しよげい)にふかく心を入まなぶもの。彼に
てらし天下の人にすゝめよ縁を見出し。なとへバすこし
なりともまなびしらんもの。られあしくバ。もろく
の司(つかさ)として商ひ。地頭(ぢとう)武家(ぶけ)かたへも上にぞ入て
まより高禄(かうろく)を下(くだ)しおかる御恩によりて。かくうり禄(ろく)
とのハしおかるゝゆへ。その心あしきものをだ
やまふ孝(かう)の子(こ)も。不忠(ふちう)なものも。同じくになしなき
てゆかくに人の心よくなり。かならず後(のち)ハ賢者(けんじや)
あらしむまん出(いで)くる黄金(わうごん)ずくの世間(せけん)にて。此へバ大欲心ども此
禄(ろく)にめがくれ。ばくつとめがたく忠孝(ちうかう)を[illegible]をはずし。後(のち)に
ぬすみ虚(きよ)ハ実(じつ)となりの世也に。又て善心(ぜんしん)あしきをさいへバ
人々ゆへて。おしろきまでこそふかく給へられ。これぞ
諸人(しよにん)の禄(ろく)を貪(むさぼ)らるゝ世なれバ。禄にめがくれ。心な
らず聖賢(せいけん)の地(ち)に入給ひたり。いよくうより給御
とありしかバ。諸世が云(いふ)。此頃東山(ひがしやま)の或親王(あるしんわう)の御(ご)
所へまいりしを南に。拍をくらべまゐしきりすとて給ふ
ならひ。その御所の名ハ中むしや。都(みやこ)ちかき大寺の内の也
の子。世におもふかくおハしますが下人一両人從へ
つまづく。此親王の御所へおハしますが。跡(あと)さうひ二三人
おあひなく。まいりし。此御所(ごしよ)ハ上(うへ)の御用(よう)のすぢにて。
此ともこうかく此へバかさねくまいりし此へ御意(さいめん)
あるべしといひもそてねに。上京(かみぎやう)の町人に。平野(ひらの)屋徳(とく)

た湯ハよく〳〵。有徳(うとく)なるもの人あまた見しど。又
くれさゝげものもちせまいりけるに。坊主(ばうず)杉生(すぎふ)坊(ばう)
なんどゝしてまいる。物をもよく〳〵はまいりかくはしける
毎日(まいにち)御所へもまいらせおされけるが。やう〳〵はなりけるへ
よく手紙を書。膝(う)をし奥(おく)に障(しやう)じ仰る。このみ命
も。おりみて用(よう)人が仰りてまいりければ。ひおうさ
まいれんでも。くよう。合のうち世とハ書も出しど
も。かやうには身き御所へ。見びくまいるも。ぬらし
き人のふるまいを見るく。みちうれ親類(しんるい)ともあつじて
いとおもひ。そのくらハ。ふかけはまいらず。中みはきと
かり世話中れ笑ふ由ひ。なかが仰しやうにハ

のはさとひようつきあはうれた世に生れつく。え治すまし
まりなさましきるのとふかく。よ縁づよ心をはる深
出むるゆへならぬ世をのがれ山居に引籠住る也
とかくりおへバ一休上人のいはく。からやうに法人の心。
ゆくよとし夜ふかくのちくいいくて住んと
いへバ用ねのまゝひけるハ。のらすね。自然くよやし
きりの天下国家をおさむらぶもうしならは名号の家
は。よくおさむる人。大社は名利く。名をも立ち邪神の
国ろハさむく。君ハ臣下のちらまつるを親とこ
ろしろ。我らろし。上下のまことなく。出るにあつれ
と思ひとし。よ縁づハ人のいひおしまなる。夜ことと行

あ人は。おとろへいたり西のひしりのハさる人唯
庭生がいひしやうに。よ縁づハ人心合銀に掃はまりく。この
君子ぞ生といきれし自然は。安楽国のおとくよう
出るもつきたるを見とし知ちふ知によう夜もちに。見ぐ明
てもくまつくも利欲の雑法のまゝかく。一生くらし
住るんハ。口おしき次第なり。人くハいつくおもうしまひ
ぬ家や。我ハかやうに人の心ぬちく我いよおもじくな
里住るとて。今家も神中人さん人との緣ひねれい
よ時節がいつて。何といの里にふとも。おぼし召し
ひやうらぶ後世の人。心よくなる里やまうしく。ぞのその子
細は。まことよ人にまじめくのちぶ神明にかなふまじれ

こゝは。かならずあるものなり。人はたゞしくして。神明あり
わせむなるは物としといへば中ねちまひくやうしれ
願がかなはしやうとゆめたるひとく。人ゝわはゆく猶は。
伊勢(いせのくに)国松坂(まつざか)といふ所につきて翁(おき)ひとりありけり相
子がいつく。あゝよりて参宮(さんぐう)の貴賤(きせん)しげく詣る代ゝ
でゞそくさゞくの我国(わがくに)の人ゝ。これも縁人の父(ちゝ)と母(はゝ)と
の為神なれば。祈るゆゑなれは。おもひおもひもおとづれ
みなさゞれ来父の人ゝ。なほのねがひ正直(しやうぢき)してぞ猶え
あらんといへば中ねの縁ひけるは。神明はかゞみの
あとくみえくおのれの胸しもれは。おのきとひとへば。おのき
とうてし。印見とひとへば。志うきとてしまこと代

をてむ人ば。海こそうつしは。洗ひともてびん人
は。流るとむかふなり。されば人ゝの心まさ
ひかく清るとの縁ひきけれは。悪無ありがたくお
もむきの清とく。かゝりゆく程に。宮川(みやがは)の清(きよ)き
れは。おのく穢(えび)のけがれと清めゝ。山田(やまだ)の原(はら)の翁(ぢゞ)
まつさけむ人ゝはかゝりけるん。あゝ中なれね
かりけるやうは。さくほどの人らと。これ合の
神はよみなりて。あさましく清るといへば。中ねせ
あひく。にはしきすみやうりう。家(うち)は老人(らうくは)の中(うち)に
志くもとゝしも余所(よそ)の夜見不知なわとの縁ひを
もひなるかゝりけれは。来父の貴賤(きせん)の中に縁兄(さうよ)

のちの人ハ。釈尊ちかくバよしねはるゝすゝてうけ給はれども。色もむしハさとこそあしめ。神通仏所ハ十銭自知ど。他ちりしぬれバ。釈尊ハまでをはらしひ所の内陣まで入よりなりとはへバ。中将殿まひ。あしもつさいかや。わが釈尊ハ。優塡の王の。みくいとまひて。釈尊の子細あり。仏法の記を書うけ。神紙を再添せしとなり。へ右衛が今みく。よろづなりを見とめても。釈尊のおりれかゆびとありかしハ右衛がいくいうにも今みく。優塡の釈尊へ参りはまいぞもせ紀ましなりとて懐より。法み

とぞ申し。一如上人と。性子と。以安と三人の御供所みかくおりしける。釈尊へ備へまゐらせて法師の慈木大事なりしかれバ。信心の浄僧侶あまたく法入ひとて。中将殿とぞ宝が経のきはりなききさ。此三人の入たを物きたる男。ことおぼしく。釈尊ちかくりくぞちかし。夜词おどろきてまゐりて。底がていで中将殿ハ。あんなおく遠してとほさおくおりひれ所よ。右衛うらむひ。いかに黄金のちうち見給へとひかれバ。中将赤面してまひて。をそ法師のたまはでさて告げよまうら見へもろねきよせのおひけれバ。山すむずや。我ハ荻原の

申ねといふものなり。志のびて来迎し給ふ也。此
處ゝ僧尼の禅衆ちかくまいりぬ。不去前に神仏
行者身をかくし自由に心へ住するハ。何とし給ふ
あやまりぞと問ひたまへバ。此法師のいふやうハ。此家ハ
むかしより神宮の神おちつくハ。如申さずバ。見えたまへバ
に僧尼のかゞみ不ありとこそ申。申わ変とて
をへ見て。おもてもなく。今我同化しける此家の
人々さらにまらじとぞ申れ。今尼ゆへに。神おちつくを其の
同化申さぬうとの給ひしかバ。ころ時法師乃いひ
けるハ。それハ今が神おちつく来りしるあくはへ
此家ハまかり申さずとぞ笑ひ。立て里へ帰

も興さめくおもしけれが内宮がけしけれバ。内宮
所ハら。夜の乃給しやうみくあり長とらひ給れ
バ本ねの給しバ。末清かあさましさよ。内宮が
乃やうに。内の治まり理ごとを後ハすてられ。僧正の上
ざりおるんぞられしまれども。の給し内宮がいゝく
う兒世の人は。わあそしるすを咲みぺられ合よ
て給ふかり。合紙よあきミつろりのとが。大悪人どい
危た言人といひ。賢人なりといへるを。禍手不知
ぞななふいとぶ悪人ならといふハ。是れ合紙の
とまらざりあらずやといへバ。僧ふがいつくむつよ
里。漢家本朝ひとつひのことかく。聖人賢人志ら

と舎しめ給ひしハ。是ならとあるをされバ一
如上人のいへく。神おの神道ニらよ。合さ兒なりのこ
お隠しく。昔神明の御こと給。是兒まへ志道
りのなしといへバ内宮がいつく。内裡なり。神明の御
ことをおりふら合紙の御ことが。ふろ兒ゆへそい
ならとかくりつでおそく。外宮内宮おがみおかりて。
びんく宇治橋のちらさ前よつく。猿乃流られ
堅すわもち合。その夜同じ人く。不思議の夢を見
給ふ。是よりへバ大内裏のやうなる所よ。榊の木枝
ぎりあひけりかよ。榊の葉よこられ志うがつきい
みく志兒林ありもらぞのうへるりに。白木れ

天門いふかなしへ。おほくありけるが。是をとへば。紫
宸殿のやうなる殿の。玉をちりばめかけたる内に。
老と浄穀ふくく。めづらしき参詣のものの仙人を
よくもてなせと。おほせられければ。びんづるゆふる
童子二人いでて。中納言をともなひ。これよりおくさ
へと伴ひ行て。清じもなかどに。これはいまも
けれども。ぎよくの斎はみじくげにも見れ。八足の
清くえよ。猿楽なしべてあり。その時。二人のとらじ
さ仙人の人々よむりひそくがりけるは。そもそも此の
不浄がはゆる所ともひまひけれず。ちくは日本の
おつけるところなり。おのおの儒者道の三教をさとし。釈
明の内證をうかがひしりしく雑談の二代先へ。
一心のまことよりとし此けれよりがひ向ふある
のふは。まいりも向ふ。今日よりしつくべからたの
そぞくしきをとらひもとて。一心のさくまれる。これ
まことあまく。神明のいき代なるしまある気生の
心はわよらい里。深くもせつくまふし。ための神の
みちの里は。深の所の形しとかりまひしと。音なく
きさとあつしきけれられよ。名誉おしくとも。神語
山のあくしよ。夢さめくて世中納言をとかくもおもふし。
夢想の深くうりきれば一休上人も様子も皆と
あらし夢想なり。人々ありがたく思ひへりとし

上人は神明の法施とふかくあこごとゝおぼし。中
ね夜を先（さき）に立（たて）て。人々又若宮（わかみや）にまいり。おもされ
神咒（しんじゆ）をとなへく。名殘（なごり）つきせぬみもすそ川の流
うきながれをとゝて。下向（げかう）の樣かぎゆるむ紀もる。
中ねの給ひしは。おのくありがたき。御つげとうけ
ありぬ。むかしくわんぺいは。まげうしきまかなり。都よ
て人々は儒又道（じゆしやだう）のあそび。たすけしたまふありが
ぐらりとなし。都のたよりにせんとおもしろへんと
おもひ。硯筆（ゑんで）をとりて。ひかがらとどらじ兇
かりぶおつかをとなるん。とのく都よかへり。またひが
し山の中ね代山荘（さんさう）にへまうが一人上人のいりくかく

かめでたきみことのりをかうむり。じまんしんハなさけなし。目なきもろ人ハすゝめ呼ばん。いざや性をハ。東国（とうごく）のうへくだるまで。ことごとくの人ハまよハしめ給ふ。我ハ西国（さいごく）乃主がかぎり。諸人の縁類（えんるい）まで末（すゑ）まかつて給ひぬ。直（ねと）し。一念（ねん）の縁とすゝめんとて。二人乃人ハ。東国（とうごく）と西国（さいごく）へくだりて。あまねく非路の縁とすゝめ給ふ。西国ハ極楽（ごくらく）よりくだりて。浄土の衆生あしきも給ふ。西国ハあまねく誠（まこと）乃一（いち）よりもしれて。人の人ハ帝人。おのづから急（いそぎ）ぬ。法より東山殿（ひがしやまどの）へくしめして。藤原家（ふぢはらけ）へたづね。あひもしバ。さ法るす仰（ここ）ところすれバ。法一巻（くゑん）をさづけ給ひぬ。東山殿よく又経ひらく。されハ天下（てんか）の人乃かゞみなり。此経を（おさく）め。人をおさむ給のかゞみなりとて。こうげうし御筆（ふで）を染（そめ）らまく。人鏡論（じんきやうろん）と題号（だいがう）しるひ。おぼしめす法心のおもむきを。奥書（おくがき）によくへまひしくゞ。その世乃大名高家（かうけ）。下（しも）ハ志川がふ世俗乃うらまずくも。法おぐりをよみて利欲（りよく）のまよひをふりすて一心（しん）乃まことにつく。ふかきをしへのふかき。よく後ぞろく。をのだうろハよかなひけれならバ。ひとへに大樹（たいじゆ）の御代（みよ）久（ひさ）しくおさまりまんさん志給しなりとぞ。人々誦（じゆ）しけれ教（けう）ハ。ちかましくよみてありとぞ

東山殿御奥書ニ云

古き世のさかえもしらざるに。いやしきがちまたの言葉に。世のすみならひを里をまなびしいね

り。孫なかりけれ。家に長亨の和の水。東山の隠羽林中院右神たの達人

なりしかば。和ハ幼よりしき友とする朋まや。老佛の門徒に。一如上人といひしも

のと。性子といふ儒門のものと。羽林の孫にあひもく。儒仏二教をもて。君神たに

對し。縁論じて。終に根元なりしが神明のりさをおめく。孫の後のさらめのぞ

めに。三人宗廟にまいりけれが。社のほど遠野路なるものくられしに。かの世のみどきる業ま

志見まざまをみて。いよいよおのく清一の心はなはほしある。神風やかんとする川の清きながれに。ある

たなぶ御告あらけ。人のちゝのよふしぬかなとゞ。ぞくなかにまぜよせて。ぶくに教を

なか次。孫に目のもとの大なるなりけれ里。ひとつやれのまさいげて。あまさの人の人なか

その。東にいでゝ西にいづる。ぞひとへり羽林のやよりかゝられ。中法物語を見んとのぞむに

ぞとえバ。なんのあますけりあらん。い爲しき

220
28
1

道をゑがゑとくとりをしらし。おもてよりうらより
以へしゑんばかりの法りしありを治むるの法まちかはらん。
是武にもあらず。文にもあらし。よもすがらのむれ
業にとは口伝しきのこ。其ぐ深きにむりふだうり。
此物語の終りに言葉とかへ紀氏流のこと

長享元年冬十一月如意珠日　武林源義政

右之一冊者以佐々貴管領氏卿
朝臣自筆之本転写之矣

元禄三年庚午仲秋
二條通大恩寺町書肆武村新兵衛板行